

国立駅前円形公園：水禽舎 追加情報

はじめに

国立駅は2026（令和8）年4月1日に開業100周年を迎えます。

国立駅の南口には大きな駅前空間が存在していますが、この空間は国立駅開業当時に駅と一体的に整備されたもので、駅前広場としては珍しい例とされています。また、規模の大きな駅前広場を有する駅として先駆的な事例であり、他駅のモデルとなった可能性が高いとも指摘されています¹。この駅前広場も国立駅と同じく、間もなく開設100周年を迎えることになります。

駅前広場の中央には「円形公園」と呼ばれる直径約29mの緑地帯が存在しています。この緑地帯の中心部には防火用水槽を兼ねた幅約10mの八角形の池があります。この池は、駅開業後間もない頃に水鳥たちを飼育・展示していた水禽舎の痕跡でもあります。

この水禽舎については、2017（平成29）年11月1日より、当館HPで「国立駅前円形公園：水禽舎」と題した資料紹介を掲載・公開しています²。さらに、2023年に当館で発刊した小冊子『円形公園はじまり物語』では、この紹介文を一部改訂したコラムを掲載しました³。

駅前広場にあった水禽舎の設置については、国立駅開業当時を撮影した貴重な写真資料等の比較・検



写真 旧国立駅舎の屋根の位置からみた駅前広場
2019（令和元）年9月撮影

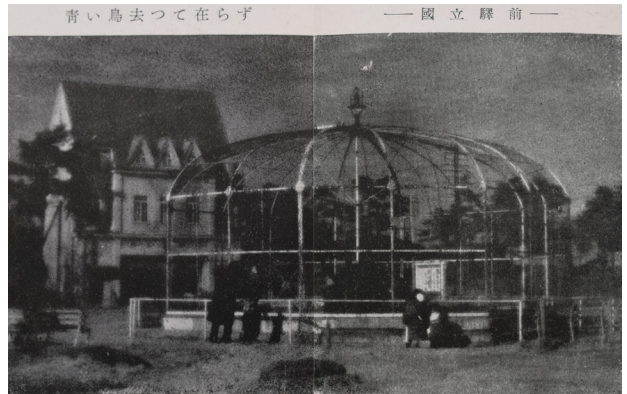
討から、駅開業直後の1926（大正15）年5月前後に設置された可能性のあることを指摘しています⁴。

しかし、水禽舎が撤去された時期については参考となる資料が乏しく、詳らかなことは分かっていませんでした⁵。

最近の調査で、東京商科大学（現 一橋大学）の卒業アルバム⁶や太平洋戦争中に認められた日記の記述に、水禽舎が駅前広場から姿を消した時期を検討するのに新たな手掛かりがみつかりました。

今回、先の資料紹介や小冊子掲載コラムの追加情報として、それらの資料を紹介します。

1. 東京商科大学の卒業アルバム掲載写真



資料1 『東京商科大学卒業記念写真 昭和十八年九月』（東京商科大学、1943年）266・267頁掲載写真を抜粋・加工 資料提供：一橋大学学園史資料室

上の写真（資料1）は、1943（昭和18）年9月22日に発行された東京商科大学の卒業アルバムで、「国立展望」と題して大学周辺の風物を見開きに掲載した写真の一つです。アルバムでは頁をまたいで2枚に分割してあるものを接合しています。

現在の円形公園に存在した水禽舎を中心に写しており、数名の人物がケージ内をうかがっている様子も写し撮っています。

ケージの奥、左手の建物は、駅前広場の西側にあった商業建築で、現在の三井住友銀行国立支店の位置に建っていたものです⁷。この建物のある位置から、

1 『国立駅周辺プラン報告書』（国上市建設部、2000年）7・8頁。

2 当館HP：机上のメモから 資料紹介「国立駅前円形公園：水禽舎」 <https://kuzaidan.or.jp/province/curator-info/20171101-1/>

3 『円形公園はじまり物語』（くにたち郷土文化館、2023年）22～32頁。なお、この小冊子は、2021（令和3）年10月に旧国立駅舎広間で開催したパネル展示の内容を基にして構成したものです。

4 前掲註3の小冊子16頁。

5 前掲註3の小冊子のコラムで、「少なくとも昭和10年代半ばまでは水禽舎として利用されていたと考えています」（30頁）と述べるにとどまっています。

6 卒業アルバムの調査では、一橋大学の学園史資料室が所蔵するアルバムを2023（令和5）年秋に調査させていただきました。同室所蔵の卒業アルバムをまとめて調査できたことが、今回の報告につながっています。同室の羽毛田様をはじめ、資料室の皆さんには面倒なお願いにご対応いただきましたこと、改めて感謝申し上げます。

7 この商店建築に関しては以前、展示資料紹介として当館HPで関連資料の紹介をしています。

当館HP：机上のメモから 『赤い三角屋根 誕生—国立大学町開拓の景色—』展 展示資料の紹介-4「国立の或る商店：国立運送店をみる」

水禽舎の南東側から北西方向に向かって撮影した写真であることが分かります。撮影時期ははっきりしませんが、アルバムが発行された1943（昭和18）年9月までに撮影されたものであることは確実です。この写真自体も貴重な情報なのですが、ここで注目したいのはその上に記された「青い鳥去つて在らず」のコメントです。写真に付されたこの表現が何を意味しているのか、このアルバムだけでは理解しがたいのですが、1941（昭和16）年12月の卒業アルバムに、そのコメントの意味するところが分かる記載を確認できます。



資料2 館蔵資料『東京商科大学卒業記念写真 昭和十六年十二月』（東京商科大学、1942年）301頁掲載写真を抜粋

上の写真（資料2）は、1942（昭和17）年1月25日に発行された東京商科大学の卒業アルバムで、「今昔ものがたり」と題して様々な事物を見開きに掲載しているなかの一つを抜き出したものです。

「今昔」と題して2枚の写真を掲げており、左側にはケージ内の水鳥を内部から駅舎方向に向けて撮影した写真を、右側には水禽舎のケージを外から駅舎方向に向けて撮影した写真を掲げています。下には「青い鳥が居なくなつたのではないんで、カモが居なくなつたと云ふお話」と説明を加えています。この説明を踏まえて改めて写真を見ると、右側の写真にはケージの中に水鳥が写っていないことが確認できます。以前は水禽舎で飼育されていた水鳥が、今は居なくなってしまったことを、「今昔」として示してあるようです。

当時の回顧録に拠ると、国立駅前にあった水禽舎は、ケージを残したまま、飼育されていた水鳥が先に居なくなつたようです。それは太平洋戦争下での食糧事情が影響したものと言われています⁸。

資料2は、水鳥が飼育されなくなったことで、水禽舎がその機能を失った点が示されており貴重な

情報です。また、先の資料1のコメントは、資料2の説明にあるような表現を受けて、水鳥が飼育されなくなったことを、「青い鳥去つて在らず」と表現したものとみられます。

資料2が掲載された卒業アルバムの発行時までには水鳥の飼育が中止され、資料1にあるように、その後も飼育されていなかったことが分かります。

では、いつ飼育が中止されたのでしょうか？

この点を明確に示す記述は卒業アルバムでは確認できませんが、資料2より前の卒業アルバムには、次のような写真とコメントがあります。



資料3 『東京商科大学卒業記念写真帖 昭和十五年』（東京商科大学、1940年）292・293頁掲載写真を抜粋
資料提供：一橋大学学園史資料室

上の写真（資料3）は1940（昭和15）年3月28日に発行された東京商科大学の卒業アルバムで、国立の風物を見開きに掲載したうちの2枚を、そのコメントと共にそれぞれ抜き出したものです。

左の写真はアルバムの292頁に掲載されたもので、東京商科大学の学生とみられる2人が水禽舎の水鳥をみている様子を収めています。右の写真は293頁に掲載されたもので、国立駅舎をバックに水禽舎の内部から水鳥たちを撮影しています。写真には「或日 くにたちの鴛鴦夫婦が云ひました『狭いながらも楽しい我家』と」というコメントを加えています。この写真は、資料2の左側で使用されているものと同時に撮影された可能性がありそうです。

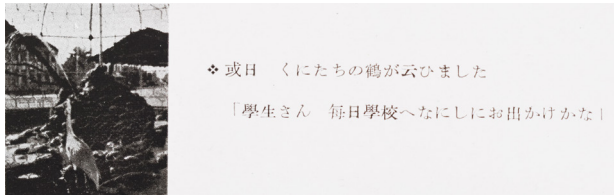
さらに前年、1939（昭和14）年の卒業アルバムも確認してみます。

右頁の写真（資料4）は1939（昭和14）年3月28日に発行された東京商科大学の卒業アルバムで、国立の風物を見開きに掲載したなかの1枚です。そのコメントごと抜き出してあります。

撮影方向は不明ですが、水禽舎内部の鶴を中央に

<https://kuzaidan.or.jp/province/curator-info/> / 『赤い三角屋根』誕生—国立大学町開拓の景色—4/

8 国立市在住の芸術家であり、郷土史家としても知られた関保壽（号 頑亭）氏は、1991（平成3）年12月に国立市公民館で開催された「くにたち<しるし>ウォッチング」の第2回で、参加者から水禽舎がなくなった理由を問われたのに対して、「戦争で餌がなくなつたんです」と答えています。



資料4 館蔵資料『東京商科大学卒業記念写真帖 昭和十四年』（東京商科大学、1939年）262頁掲載写真を抜粋

収めた写真に、「或日 くにたちの鶴が云ひました『学生さん 毎日学校へなにしにお出かけかな』」というコメントを加えています。

資料3・4では、大学が所在する国立の風物のひとつとして水禽舎を取り上げ、水鳥たちを擬人化してコメントを付しています。このような卒業アルバムの掲載内容からみて、この時点では水禽舎はその機能を保った状態にあったと考えて良いでしょう。資料3を掲載した卒業アルバムの発行時、1940（昭和15）年3月の時点では、水鳥は水禽舎でまだ飼育されていたものと察せられます。

それが資料2になると、「カモが居なくなつた」という点をクローズアップして伝えています。この時点では水鳥の飼育が中止されていたと考えられます。

資料3と資料2の間、卒業アルバムの発行日からすると、1940（昭和15）年3月28日から1942（昭和17）年1月25日の間に水鳥が飼育されなくなっていた可能性が高いと推定できます⁹。

国立駅前の人気スポットとして多くの人々を惹き付けていた水禽舎でしたが、1940・1941（昭和15・16）年頃に、残念ながらその機能が失われてしまっていたようです¹⁰。

2.『戦時 庶民日記』の記録

水鳥の飼育が中止され、水禽舎としての機能を

失ったものの、ケージはそのまましばらくの間は残されていたようです。その後、戦時下の鉄の供出によってケージが撤去されたという当時の回想があります¹¹。

敗戦近くの出来事で、回想以外にその事情を知ることができる資料に巡り会っていませんでしたが、最近になって戦時下の日記に記録を見つけました。

日記は、国立にもお住まいのあった歯科医師の碓氷元氏が著されたもので、戦時下にご自身が認めた日記を取り纏めて、1976（昭和51）年に『戦時庶民日記』と題して海燕社から刊行されています¹²。

1943（昭和18）年1月20日の日記に次のように記録されています。

「（前略）鉄製の物は何でも供出しろというので、昨年、嵐の山水中学〔現 桐朋中・高等学校：引用者〕入試準備のため作った鉄棒と、煙草の灰皿のセットを供出する。

国立駅前広場に水禽を飼っている大禽舎も鉄製のため、あたら遂に供出せざるを得なかった。（後略）」

この記録から、軍部への鉄製品の供出が進められたことで、この時点において水禽舎のケージまでもが供出されたことが分かります。日記という性格から、その日付が示されている点で貴重な情報です。

この記録から1943（昭和18）年1月には水禽舎のケージは撤去されたと確定したいところなのですが、次のような回顧録が遺されているのが気になっています。

1944（昭和19）年4月から翌年3月までの1年間、第一山水中学校に在学した有末道夫氏が、「国立の

9 資料3と資料2の間には1941（昭和16）年3月28日発行の卒業アルバム『東京商科大学卒業記念写真帖 昭和十六年』が存在しますが、どういう訳かアルバム内に水禽舎をピックアップした写真が掲載されていません。この段階で水鳥の飼育が中止されていた可能性が排除できません。なお、資料2を掲載した1941（昭和16）年12月の卒業アルバムについて、東京商科大学の大学新聞である『一橋新聞』第338号（1941・昭和16年11月25日）2面に「卒業アルバムの編輯進む」と題する記事が掲載されています。記事では「本年度の卒業アルバムは卒業期の突然の繰上げの為、相当編輯上に支障を来し、一時は発行不能のおそれもあったが、その後アルバム委員の努力により、編輯を著しく能率的にし、平常の年より三分の一の時間で編輯を行ひ、去る十八日には完全に編輯を終了し、既に銅版も半分は出来上り、入営までには卒業生の手許にとゞく様万全の手筈を整へた」と報じています。戦時下で卒業が繰り上げられ、卒業アルバムの編集作業を急ぎ、同年中には編集作業を終えていたことが知られます。

10 国分寺市の観音寺に生まれた画家 佐藤多持氏のアルバムには、1940・昭和15年11月11日に、水禽舎と国立駅舎をバックに撮影した写真が遺されています（前掲註3の小冊子31頁に写真掲載）。佐藤氏の記録によって撮影日が分かる貴重な写真であり、水禽舎も大きく写し撮られているのですが、ケージの内部に水鳥が居たのかどうかまでは、はっきりと分かりません。

11 国立市が2000年に実施した生活史調査では、「水禽舎は戦争中の鉄の供出によってなくなった」という聞き取り調査の記録が確認できます。

12 碓氷元氏は、国立に邸宅を構えていた宇垣一成氏（1924・大正13年 陸軍大臣就任）の近くにお住まいであったようで、趣味の乗馬を通じて宇垣氏と親しく交流されていたことが分かります。国立市による聞き取り調査の記録でも「ウガキ大将が馬に乗っていたけれども、それはずっと後。ウスイさんという人も馬を持っていた。大学通の左側〔東側：引用者〕に住んでいらした」との回想が確認できます。因みに、資料3を掲載した東京商科大学の卒業アルバムでは、国立の風物のひとつとして、騎馬姿の宇垣氏の写真（「国立の惑星 宇垣さん」）を掲載しています。

駅前ロータリーに大きな鳥かごがありました。たしか当時、鳥は居なかったと思います」と回想されています¹³。この回想に拠ると、1944（昭和 19）年にはまだケージが残っていたことになります。この時点で水鳥が飼育されていない点を指摘している回想であり、当時の状況を詳しく思い出しているものとも考えられます。その点を踏まえて慎重に検討する必要がある情報と考えています¹⁴。

また、前掲の資料 1 は、1943（昭和 18）年 9 月 22 日発行の東京商科大学の卒業アルバムに掲載された写真でした。卒業アルバムでは、前に撮影してある写真を、何年度かにわたって再掲載することがあり、卒業年度の状況を反映した写真ばかりが載っているとは言い切れません。しかし、ケージが撤去され、池だけが残された水禽舎が駅前にあったのならば、その様子を収めた写真を用いたのではないのでしょうか。現代の感覚をもって戦時下の状況を推し量ってはいけませんが、「青い鳥去つて在らず」と水鳥が飼育されなくなったことを示すにとどまらず、ケージまでもが撤去されたことを表現した方が効果的であるように感じます。戦時下の状況が、鉄製品の供出を指摘するような表現を許さなかったのでしょうか。この点も気になっています。

碓氷氏の日記の記録を発見した時は、躍り上がって喜んでいたのですが、他の資料との比較を通して、断定するにはもう少し慎重な検討が必要かと考えるに至りました。いずれにしても、当時記録された日記に基づいた記述であり、とても貴重な情報であることは間違いありません。

現段階では、1943（昭和 18）年 1 月に水禽舎のケージが、鉄製品の供出によって失われていた可能性ができた点を指摘しておきます。

おわりに

水禽舎としての機能を完全に失った施設は、その後戦時下で残された池が掘り下げられ、貯水池として利用されて現在に至っています¹⁵。

水禽舎が失われた後、国立駅前の「駅前貯水池一帯の管理権」¹⁶を委任された住民組織の国立会は、国立駅開設 25 年の記念事業として寄付を募り、「終戦後荒廃せる国立駅前円形公園の大修理」¹⁷を実施、1950（昭和 25）年末に一応の完成をみています¹⁸。

現在、国立駅南口駅前広場にある円形公園は、この国立会による整備がベースとなって引き継がれてきているものです。

【2025.07.07：中村記】



資料 5 国立会によって整備された円形公園 1950 年頃
資料提供：明窓浄机館



資料 6 国立会による整備後間もない頃の円形公園
1951 年前半頃 資料提供：平野武利氏

13 『衣食たらずとも…戦中・戦後の学校生活』（山水桐朋四期生会、2001 年）54 頁

14 前掲註 13 の中には、他にも 1943（昭和 18）年秋に初めて第一山水中学校を訪ねた水野宏氏が、「人影も疎らな駅前のロータリーには巨大な鉄製の鳥籠があり」と述べられ（68 頁）、1944（昭和 19）年冬に国立駅に降り立った有田実氏が、「駅前に円形のケージカロータリ様の構造物」と述べられています。いずれもまだケージが残っていたと回想されています。

15 国立市が 2000 年に実施した生活史調査には、水禽舎がなくなって防火用水となったのがいつかの問いに対して、「戦時中である。ここを掘り下げて非常用水に使っていた」という聞き取り調査の記録が確認できます。

16 国立住民の地域新聞であった『国立文化』第 1 号（1949・昭和 24 年 8 月 15 日）3 面掲載の「駅前管理は会へ 桜並木下農地は返還か」と題した記事では、「駅前の美観を取りもどすこと」等について箱根土地株式会社の中島常務を訪問した国立会の池田由太郎会長が、「駅前貯水池一帯の管理権を心よく委任してもらえらることとなつた」と報じています。

17 国立市公民館図書室所蔵『国立駅 25 周年記念事業報告』（複写資料 原資料は 1951・昭和 26 年頃）

18 『国立文化』第 15 号（1951・昭和 26 年 3 月 22 日）2 面掲載記事「並木下の花壇化 もう一歩で実現へ」では、「国立駅前の円形公園の美化施工を昨年未までに一応終了した国立二十五周年記念事業委員会」と述べています。なお、国立音楽大学附属図書館所蔵の『くにたち音楽』第 3 号（1951・昭和 26 年 1 月 1 日）6 面では、資料 5 と同じ写真を掲載して「新粧なつた国立駅前円形公園」と題し、「国立駅開設二十五年、一橋大学七十五年記念祭は去る十月盛大に行はれたが、記念事業の一つとして駅前美化を計画し〔マ〕駅前ロータリーが、写真の如く小公園風に面目が一新された」と報じています。この記事については、一橋大学名誉教授の田崎宣義先生からご教示いただきました。